

高大連携における異世代交流の意義について

— 高校生、大学生、高校・大学教員による創発的な学びをめざして —

The Significance of Intergenerational Exchanges in Cooperation
between High Schools and Universities

— Aiming for Emergent Learning by High School and University Students and Educators —

川合 宏之*

Hiroyuki Kawai

本稿では、高大連携事業の特色を異世代交流という側面によって把握し、初等中等教育と高等教育の断絶を解消する取り組みとしての意義を導き出した。また、そこに介在する多様性の承認という視点は、近代社会において獲得されてきた「自由の相互承認」という理念とも合致するものである。この理念に基づく教育改革を推し進めていくことには、市民社会において教育機能を担う学校という場の意義を引き出す上で、十分な妥当性がある。

キーワード：高大連携、異世代交流、多様性の承認、教育改革

I. 問題提起

本稿では、高大連携・高大接続に代表される初等中等教育と高等教育をつなぐための取り組みをひとつの参照軸としながら、21世紀の多様化する市民社会のなかで異世代教育を実施する積極的な意義について論じることにはしたい。また、そのような論述を通じて、今日のさまざまな教育改革の目指すべき理念を明確にすることのできるような視点を導き出していくことを目指したい。というのも、これまで、高大連携事業の意義については多くの考察がなされてきたものの、その理念を個別の取り組みのなかで十分に実質化することは難しく、単発的な取り組みに終始してしまったり、高校と大学のあいだでの調整に労力を割かれてしまったり、といったかたちで、改善の必要性もつねに指摘されてきた。本稿では、近年のセンター試験の廃止、多様な入試選抜制度の実施といった既存の教育システムを根本的に見直す取り組みを通じて今日の文部科学省が目指している理念を念頭に置きながら、現行の教育制度改革のなかでの高大連携・高大接続の積極的な意義をはっきりと明らかにすることにはしたい。このように目指すべき教育理念を明確化することによって、実際の高大連携型授業の実施にあたっては実効性のある取り組みを行うことが可能

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

となり、また、関連する教育制度上の改革事業と目的を共有し、場合によっては連携させるかたちで、さらに創発的な制度改革を実行することも容易となるはずである。

なお、本稿において取り上げるのは、表題にも示したように、主に高大連携をはじめとする異世代のあいだでの協働的学習の意義についてである。また、その中心的な概念として、苦野一徳の示した「自由の相互承認」という概念提示に基づくかたちで、市民社会における多様性の承認というキーワードを提示しておきたい¹⁾。教育は、市民社会を構成し、ともに協力しあう相互主体の形成という崇高な理念を持っている。日本では、しばしば教育課程を修了して就職することを「社会に出る」と表現することもあるが、この慣用的な表現には、そもそも教育現場もまた社会の一部であるという視点が欠落してしまっている。本稿では、市民社会のなかの一機能を担うものとして学校教育の意義を問い直し、そのなかで、多様性の承認という理念を実質化するための方途のひとつとして初等中等教育と高等教育との接続の必要性を強調することによって、高大連携事業をはじめとする具体的な各教育改革の必要性を十分に明らかにすることを目指すことにしたい。

また、その補助線となる考察として、前記の苦野の提言を踏まえるかたちで、近代社会においては多様性の承認という理念こそが普遍的価値として前提されるべきものである、という視点について吟味することにした。その視点の一つとして、本稿では、近代以降に実質化された男女間の教育の機会均等についても取り上げることにしたい。すなわち、近代日本において公教育が開始された明治期には、基本的に男子にのみ教育の機会が提供されていたこと、そして、それが現在へと至る流れのなかで、原則としては男女間に平等の教育機会が与えられるようになったことを取り上げ、そのような変化の根幹にあるものとして、前述の多様性の承認というキーワードを抽出する。そして、現在では当たり前のこととして認識されているこうした機会均等の理念が、歴史的にはさまざまな制約を乗り越えて獲得されたものであったことを述べ、今後の教育改革においてもまた、そのように新しい価値をめがけ、また、苦野が「異文化異世代教育環境」²⁾という言葉で示しているような、その理念を実質化していくための不断の見直しが必要であることを強調したい。

II. 本稿の目的

以上の問題提起に基づき、本稿では、現在本学で実施されている高大連携協定校における高大連携事業を異世代交流のひとつとして再定義しながら、その根幹にある多様性の尊重という概念を公教育における統制的理念のひとつとして意味づけることによって、21世紀の市民社会における教育の意義の根本的な原理として、さまざまな教育改革の前提となる視点の一端を導き出すことを目指したい。

Ⅲ. 本稿の方法的前提

前章の目的にもとづき、ここからは、実際の高大連携事業に関連して実施したインタビューの結果（A 商業高校、8名、高校3年生女子、2016年1月）を踏まえた上で、その教育的な意義の一端を抽出することにしたい。本稿の根拠となるインタビューデータは、高大連携協定校である商業高校の高校生ならびにボランティアとして参与した大学生を対象としたものである。また、その実施にあたっては、筆者自身の担当する高大連携型授業、とりわけ一年間を通じての継続的な高大連携事業の実施という特色ある取り組み過程を活かして、高校教員と大学教員のあいだでの継続的な授業計画の編成を行う実践事例となることを目指した。なお、本稿の関心にかかわる結果を抽出することのできた高校生のインタビューデータを使用する。そこから抽出される視点として、異世代交流としての高大連携の積極的な意義を抽出し、それを理念的に裏付けていくことにしたい。

なお、本来的には、上述のようなインタビューに基づく研究を達成度に至らしめるためには、相応のサンプルデータ量および年月を要すると考えられる。しかしながら、今回の研究の主な関心（目的）は、これまでは教室という現場において職人芸的に行われてきた授業運営の方法を構造化し、アクティブ・ラーニングや学び合いという言葉で指示されるような新しい教室づくりを成功させるための仮説を生成した上で、有意義かつ建設的な視点を提示するところにある。現在、文部科学省の各部会でも継続的に審議されているように、このような参加型の授業づくりについては、その有効性は広く教育関係者のあいだで認識されてはいるものの、そのような授業経営が首尾よく成功するような具体的な方法論についての観察結果の共有、ならびに、そこからの具体的な考察をまとめることについては、今後の課題として残されているといえる。そこで、今回の研究実施にあたっては、一年間の実際の教室運営という一回起性のサンプルに基づきつつ、教室づくりに参加した学生、生徒の主体的な語りに基づく仮説生成というかたちでの質的な分析を行うことにした。本稿は、実際の事業計画に基づくデータを収集し、商業高校というターゲットに対象を絞った上で、キャリア教育の実施にあたっての基礎研究としての知見を公表し、その成果の一端を論文化したものである。

Ⅳ. インタビュー結果に基づく仮説生成

本稿において使用したインタビューデータは、上記のように、一年間にわたる高校生と大学生、ならびに教員らによって構成される高大連携型の授業実践の結果をふまえて実施されたものであり、以下に具体的な結果を示しているのは、高校生を対象としたものである。インタビューでは、商品開発と高大連携の授業経営についての二つに大別される質問を行い、その結果、本論の問題意識とも関連する高大連携についての質問とそれに対する生徒たちの応答からは、以下のようなカテゴリーが生成された。

表 1. 「高大連携」についての質問から生成されたカテゴリー一覧

カテゴリー	代表的な切片項目
教科書があったほうがよい	教科書があったほうがわかりやすい。
教科書のない学びの大切さ	「覚える」のではなく「考える」ことの大切さを学んだ。
	教科書や問題集で練習し、覚えていくだけが「勉強」ではないということを知った。
	主要教科だけでなく、商品の企画も「勉強」の一つだと知った。
	ほんとうの学びについて知ることができた。
高校生と大学生の違い	高校生と大学生の大きな違いは「調べる習慣」にある。
	高校生の勉強の限界を自覚し、大学生のような考え方をできるようにしたいと思った。
	高校生は新しいことを生み出す力が不足している。
	高校生は答えがあるものを考え、大学生は答えがないものを考える。
	高校の授業は正しい答えの解き方を習う。
	大学教育と高校教育の質的な差を認識した。
	大学生が輝いていた。
	大学生と高校生の微妙な違い。
	大学生との視点、ものの見方の違い。
	大学生には思考しつづける力がある。
	大学生の「自分で追及できる力」をすごいなと感じた。
	大学生の発想力に感嘆した。
	大学生の問題意識に感心した。
	高校生の発言にみられる限界。
	大学生活がどういうものか理解できた。
大学生との差を認識した。	
ほんとうの大学生の姿を見ることができた。	
高大連携についての評価	また参加したいと思った。
	教育実習生は教科を教えるのがメインであり、生徒とのコミュニケーションは限定的である。
	高大連携での大学生との交流は、教育実習生の場合とは異なる。
	今回の高大連携授業のメリットは、一年間の継続的な取り組みであること。
高大連携を広めてほしい	他の授業でも高大連携をしてほしい。
	もっと高大連携授業を増やしてほしい
広報活動の必要性	取り組みを広く知ってほしい。
	魅力的な内容だったので、もっと宣伝したほうがよい。

個人的な感想、感謝	感謝の言葉。
	高校生のために取り組む姿がキラキラしていると感じた。
	個人的な大学生へのメッセージ。
	大学生への個人的なメッセージ（人格的な交流の証拠）。
授業内容についての評価	授業内容には満足した。
	授業の「本気度」に満足した。
	とてもいい経験になった。
	とても有意義な時間を過ごせた。
	勉強になった。
	満足した。
商品開発のイメージの改善	企画する楽しさを知った。
	商品開発に興味があった。
	商品開発についてのイメージがよい方向に変わった。
	商品開発のイメージがよい方向に変わった。
商品開発の知識を学ぶことができた	商品開発は「答え」があるとは限らない。
	商品開発の基本的な知識を知ることができた。
調べることの大切さを知った	わからないことはすぐに調べることの大切さを学んだ。
人生選択への影響について	商品開発の授業を受けることで人生観が変わった。
	人生選択にいい影響があった。
進路・就職について	これからも活動していきたい。
	商品開発は進学や就職に結びつかない。
	将来商品開発やマーケティングの研究をしてみたい。
	進路選択についての気づきがあった。
	進路は環境に左右される、というアドバイスをもらった。
スマートフォンの活用の有効性	スマートフォンを活用した学習方法の有効さ。
生徒自身の視野が広がった	自分自身の授業態度を反省した。
	自分の視野が広がった。
世代間交流の大切さ	世代間交流ができてよかった。
大学進学への希望	こういう大学生になりたいというイメージを持った。
	こんどは大学生スタッフとしてかかわりたい。
	授業への考え方が変わり、大学に進学することを決めた。
	大学生活への期待を持った。
	大学生になって、高大連携に加わりたい。
	大学に入って、このようなプログラムに参加したい。

大学生との交流のメリット	一緒に活動できてたのしかった。
	一緒に悩んで一緒に答えに近づいていくという気持ち が伝わってきた。
	大学生、大学の先生とコミュニケーションできるよい機 会だった。
	大学生が進路選択について一緒に考えてくれた。
	大学生と交流するのは楽しかった。
	大学生と交流できてうれしかった。刺激になった。
	大学生とのかかわりに満足した。
	大学生との出会いは多様な選択肢を知る機会だと思う。
	大学生のおかげでプレゼンも成功できた。
	大学生の声かけ、授業サポートでとても助かった。
	大学についての知識、情報を聞くことができた。
	年上の大学生からの影響は大きかった。
	発想、知識の面で助けてもらった。
	大学生、大学の先生のサポートで助かった。
大学生に対する要望	大学生によって商品開発についての知識に差があった。
地域社会への貢献	地域貢献できた。
	地域に対して貢献できた。
伝える能力について習得できた	言葉の表現についてアドバイスをもらった。
能動性、主体性の大切さを学んだ	自立的に行動することの大切さを学んだ。
	能動的に学ぶことの大切さを学んだ。
プレゼンテーションについての経験	高校の授業ではプレゼンの機会が少ない。
	発表のやり方を教えてくれた。
	パワーポイントの作成方法を教えてもらえた。
	プレゼンの仕方、準備について教えてもらえた。
勉強の面白さについて	新しいことを学ぶ楽しさを知った。
	高校生だけではできない体験ができた。
	勉強の面白さは自分で見つけていくものだと いうことを学んだ。
メンバー同士で協働することの大 切さ	いい授業は、リーダー（大学生）だけではつ くれない。
	コミュニケーションを取ることの重要性を 学んだ。
	成長しあえるメンバーを獲得できた。
	多様な考え方の人々とかかわることの大 切さを学んだ。
	一つのものごとを違った目線で見ること の大切さを知った。
	ボランティアで来てくれている大学生のサ ポートで助かった。

	メンバーのなかで役割を考えて動くことの大切さを学んだ。
	役割を務めることの重要性を教えてもらった。
	リーダーシップをとってもらった。
	リーダーの必要性。
要望、問題提起	大学生は漢字が書けない!?
	大学の先生の講義はすこしむずかしかった。
	もっとアイデアを出してほしい。
	もっと時間を取ってほしい。
文章の作り方を学んだ	文章の作り方を教えてもらった。

ここでは、それらのうち、以下に表2・3として抽出した二つのカテゴリーに着目することにした(なお、データとしての公平を期すため、かならずしも有用かどうかわかりにくい発言も平等に掲載していることをお断りしておく。また場合によっては、ここに見られる高校生からのざっくばらんな発言そのものが、高校生と大学生、あるいは教員との親密な人間関係の証左として意味づけることができるかもしれない)。

表2. インタビュー結果から:「高校生と大学生の違い」について

代表的な切片項目	発言例
高校生と大学生の大きな違いは「調べる習慣」にある。	あと、私が高校生と大学生の大きな違いを、「調べる時」に感じました。高校生ってあんまり調べるといふ習慣がありません。でも大学生のほとんどの人が図書館を活用しているらしいし、インターネットの検索するやりかたもすごいと思いました。高校では図書館を利用する人はほとんどいません。
高校生の勉強の限界を自覚し、大学生のような考え方をできるようにしたいと思った。	大学生と関わって自分の考えはまだまだ足りていないと思いました。私たち高校生の勉強って、先生の言われることを覚えることが中心です。新しいことを生み出したり、考え出したりすることがとても苦手なんだったと思いました。ひとつのことに對して様々な方向から意見を言える大学生のような考え方をできるようにしたいと感じました。
高校生は新しいことを生み出す力が不足している。	本当に高校生って、新しいことを生み出す力が不足しているって思いました。
高校生は答えがあるものを考え、大学生は答えがないものを考える。	大学生と関わってみて、改めて思ったんですが、高校生までは答えがあるものと考えます。でも大学生は答えがないもの考えることが得意だなと思いました。
高校の授業は正しい答えの解き方を習う。	たぶん、高校の授業って正しい答えの導き方を習っているんだと思います。

大学教育と高校教育の質的な差を認識した。	高校で今勉強しているのは、漠然とした勉強が中心だと思います。でも大学生と関わってみて、社会に直接的に役立つような勉強は、大学生の時に学ぶことが多いと思います。それが大きな違いだと思います。
大学生が輝いていた。	大学生がキラキラしていた。
大学生と高校生の微妙な違い。	大学生は、学生ですが半分大人ですね（笑）。高校生はまだ学生で、大人ではないようです（笑）
大学生との視点、ものの見方の違い。	年齢の差もあると思うけど、視点というかもの見方が違うと思いました。なんでか分かりませんが、高校1年生と高校3年生って話していてもあまり変わらないと思います。でも高校3年生と大学生って全然違うと思いました。それは、高校と大学が大きく環境が変わるからだと思いました。
大学生には思考しつづける力がある。	大学生と関わってみて、大学生は、思考し続ける力があるなと思いました。ちょっとしか年齢が変わらないのに、大学生はそういう能力は優れているように思います。
大学生の「自分で追及できる力」をすごいと感じた。	大学生と関わってみて、大学生は自分で追及できる力が合って、自分から積極的に行動される力があってすごいなと思いました。
大学生の発想力に感嘆した。	大学生ってどうして、どんどん思いつくのだろうって思いました。
大学生の問題意識に感心した。	大学生は、アンケートを集計するだけでなく、アンケートそのものをふりかえろうとしているところにすごいと思いました。
高校生の発言にみられる限界。	高校生は、思いつきというか、感想というか、あまり説得力のある発言をできる人はすくないと思いました。
大学生活がどういうものか理解できた。	大学生と関わる中で、大学生活がどういうものが理解できました。大学の勉強の仕方とかどういうものか知らなかったし、資料中の場所へ行くフィールドワークをすることも初めて知りました。研究室にこもっているイメージでした。私の知らなかった大学の勉強の一面を教えてもらったと思います。
大学生との差を認識した。	年齢がちょっとしか変わらないのに、高校生と大学生の考え方が違うなと思いました。大人の意見を知ることが出来ました。
ほんとうの大学生の姿を見ることができた。	今回の高大連携で大学生と関わってみて、大学のオープンキャンパスとは違って自分の目で、本当の大学生の姿を見ることができました。オープンキャンパスでは見られない、ありのままの大学生と関わる事が出来ました。高校とは違う世界を知ることができたと思います。

表3. インタビュー結果から：大学生との交流のメリット

代表的な切片項目	発言例
一緒に活動できてたのしかった。	一緒に活動できて本当に楽しかったです。たくさんお話が出来て本当にうれしかったです。
一緒に悩んで一緒に応えに近づいていくという気持ちが伝わってきた。	大学生からは、一緒に悩んで一緒に答えに近づいてくという気持ちが伝わってきました。
大学生、大学の先生とコミュニケーションできるよい機会だった。	大学生や大学の先生とコミュニケーションできる出来る貴重な機会だと感じました。
大学生が進路選択について一緒に考えてくれた。	何か正解だったのかは分かりませんが、大学生が、高校生だった時を思い出し、一緒に考え一緒に悩んでくれたことは、自分の進路に納得を得ることにつながりました。
大学生と交流するのは楽しかった。	チョケたり、真剣な時はちゃんとしたり、おもしろかったし楽しかったです。
大学生と交流できてうれしかった。刺激になった。	兄弟がいないので、大学生と交流する機会が嬉しかったです。普段、同じ年としか話すことがないので、大学生と話ができるということは自分にとってとても刺激的でした。
大学生とのかかわりに満足した。	大学生との関わりが「お兄さんお姉さんができた」という感覚でした。高校生のことを真剣に考えている大学生がいて、その人たちと一緒に活動したいという気持ちが強いです。今は高校生だけど、学校で友だちとはしない話を気軽にできます。そういう人に関われることが楽しかったです。
大学生との出会いは多様な選択肢を知る機会だと思う。	大学生の出会いは多様な選択肢を知る機会だと思います。この授業を通して、私の自分の進路を見つめ直し、自分で考える進路を歩むきっかけになった気がします。
大学生のおかげでプレゼンも成功できた。	困っている時は、一緒に考えてくれたり、チームの中心になって引っ張ってくれたおかげでプレゼンも成功できました。
大学生の声かけ、授業サポートでも助かった。	もともと私は、手を挙げることも、誰かに話しかけることも、怖がってしまう臆病な性格でした。しかし大学生は、いつも私に声をかけてくれました。その声かけで心に小さな勇気のようなものが生まれ、少しずつ私は変わっていきました。自信はなくても、怖くても、まずはじめの一步を踏み出してみるきっかけをくれたのが、大学生でした。
大学についての知識、情報を聞くことができた。	商品開発についてだけでなく、大学などについても先輩方から話を聞くことができました。
年上の大学生からの影響は大きかった。	もちろん同年代の友達から影響をうけることもあるけれど、年の近い年上の大学生の影響って大きいと思いました。共感できることが多いです。

発想、知識の面で助けてもらった。	特に発想とか、知識の面で助けていただきました。
大学生、大学の先生のサポートで助かった。	最初は不安があったが、大学の先生も大学生もやさしく教えてくれたので楽しかったです。

まず、表2からは、高校生と大学生の違いについての、高校生側からの視点が抽出されている。ここには、主に高校生と大学生の学習態度の違いが明らかに出ているように思われる。その違いは、とくに「調べる時」に露見すると仮定することができる。高校生の勉強は「先生の言われることを覚えること」が中心であって、「新しいことを生み出したり、考え出したりすること」は比較的苦手である、という自己認識を読み取ることができる。またこのように、高校生に足りないのは「新しいことを生み出す力」である、という見方は、複数の高校生の発言から読み取ることができる。「高校生までは答えがあるものを考える」のに対して、「大学生は答えがないものを考える」ことが得意であり、また、そのような学習態度が要請されている。こうした発言には、すでに「答えがあるものを考える」、「正しい答えの導き方」を習得する初等中等教育の場合と「答えがないものを考える」高等教育の場合の違いが現れているということもでき、今後の高大連携事業を推進するにあたっての基礎的な視点として意味づけることができる。また、「社会に直接的に役立つような勉強は、大学生の時に学ぶことが多い」という実感を高校生たちが抱いていることにも注目したい。商業高校の場合であっても、やはり実際に社会に役立つような勉強をするには大学などの高等教育機関における高度な知識と技術の習得、さらには人間としての成長と人格の完成があってこそそのものであり、商業高校に学ぶ高校生たちにそうした実感を持ってもらうには、やはり高大連携に限らず、何らかのかたちで大学生たちとの交流の場を用意することが有意義であると考えられる。

さらに、表3に示されている大学生との交流のメリットについても見ていくことにしたい。ここでは、まずは大学生と一緒に活動できたことの充実感が語られており、どの生徒たちもおおむね満足していたことが伺える。上記の大学生との違いを自覚する声も併せて考えるならば、知識と技術の習得に限らない体験から学ぶ学習としての高大連携事業を実施する意義はあったといえるのではないだろうか。とくに「一緒に悩んで一緒に答えに近づいてくという気持ち」の実感、「大学生や大学の先生とコミュニケーションできる貴重な機会」といった、生徒と学生同士との親密な人間関係、あまり機会のない大学側の人間とのコミュニケーションというかたちで、生徒たちに人格的な交流の機会を提供していることも特筆すべきである。また、「兄弟がいないので、大学生と交流する機会が嬉しかった」という意見については、普段の教育現場で見過ごされがちな家庭環境による公平性についての議論を顕在化する。たとえば、家族のうちに兄や姉といった年長者がいれば、親とは異なるかたちで、一緒に学習する機会だとか、遊ぶ機会が自然に提供されることになる。しかしながら、一人っ子の場合はそうはいかない。教室という場において、そ

のような家族構成にまで介入することはできないが、このように高大連携事業を実施することによって、場合によっては、大学生たちが兄・姉を代補するような存在となりうる。高校生たちが「普段、同じ年としか話すことがない」という状況は、教室の均質化を前提としており、場合によっては流動的な交流を促進する必要があるだろう。高大連携事業は、そういった側面においても有意義であると考えられる。

また、上記の二つのカテゴリーの他にも、高大連携事業に対する積極的な評価、世代間交流の大切さに言及している発言例もみられた。今回の授業実践の場合、高校生と大学生の交流だけでなく、小学生に対する取り組みも含まれていたことから、とくに異世代交流（世代間交流）という側面の特色が強く出ていたものと考えられる。以上の点より、今回の高大連携事業に関するインタビューデータからは、高校生と大学生のあいだで異なる教育区分に位置することによる違いの顕在化と、双方をシャッフルするような教室運営を実現することによって、教室の均質化を是正し、多様な人たちと交流する機会を提供することができていると結論づけることができる。また、このように高校生と大学生のあいだに親密な関係が形成され、兄弟姉妹を代補するような存在になりうる、という側面において、高大連携事業を異世代交流の場として位置づけることの意義が明らかになる。

V. 異世代交流としての高大連携について

ここで、いまいちど異世代交流という言葉について吟味しておくことにしたい。一般に「異世代交流」もしくは「世代間交流」という言葉で連想されるのは、子どもと大人、そして高齢者といった年齢層のあいだでの交流活動であるかもしれない。学校教育というくくりを外して考えるならば、高齢社会化の進んだ現在、そうした視点は都市設計から社会福祉に至るまでのさまざまな課題解決を実現するための視点となっている。渡邊慶一によれば、異世代交流の目的は、「子ども期や青年期、壮年期、高齢期のさまざまなライフステージにある人たちが、それぞれが持っている感性や能力、持っている技術を出し合うことにより、自分自身の心身の向上だけでなく、周りの人々や地域社会に役立つような活動へと育てていくこと」にあるとされている³⁾。渡邊は、1980年代後半から1990年代に至るまでのあいだに顕在化してきた少子高齢化の波を前提とした上で、それをかえって「好機」として捉え、「古き時代の家族制度の良さへと立ち返る契機」とする見方を示している⁴⁾。もちろんのこと、家族のあり方は各家庭の状況によって多様であり、特定の時代の家族制度を模範化することはあくまで論者である渡邊の価値観として受け止めるにとどめるべきではあるだろうが、核家族が標準化していった時代に対して、そうではない別の家族のあり方として、渡邊の見方はひとつの視座を指し示している。

これまでの高大連携事業は、高校生と大学生がそれほど実年齢においては離れていないこともあって、上記のような異世代交流として検討されることは少なかったのではないだろうか。そも

そも、高大連携事業などの初等中等教育と高等教育をゆるやかに接続するための取り組みは、近年の大学全入時代と呼ばれる状況のなかでその必要性が問われるようになってきたといえる。1999（平成 11）年に中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」⁵⁾が提示されたことをはじめ、その後、2006（平成 18）年に改正された教育基本法で明確化された教育の理念をふまえて、AO 入試、推薦入試などの取り組みと並行する入試制度改革の一環として想定されていたのである。今後、それらの入試制度が有効に機能していたのか、また、そもそもそれらを入試制度として設定することは既存の普通教育を中心化する見方を補強する方向に向けられていないか、といった検討は必要であると思われるが（たとえば、一部の高校では小論文と面接での入試が行われ、その後、人間性や適性をもとにした大学への推薦入学が行われている場合がある。こうした事例は、主に筆記試験の成績が重視される現在の入学試験を前提とすればイレギュラーな制度であるように思われることもあるが、多様な学生を擁することは教室での議論の活発化にもつながるため、かならずしも否定できないと思われる）、いずれにせよ、すでに各地の学校において高大連携事業の実践事例が公表されており、今後、その内実の評価とさらなる方法的な洗練が期待されるところである。

ところで、高大連携といっても、日本社会における初等中等教育と高等教育とは、そもそも目指すべき方向性の異なるものとして位置づけられていた。その一例として、柳孝郎・福島愛子・松澤哲郎による高大連携事業の事例報告では、「高校生は小中高校と学校教育を受けてくることで、所謂学校の文化に染まっている」という点が問題視されている⁶⁾。その上で、「大学において求められるのはこれら学校の文化とは決別して大学の文化についての認識を持ち、大学における教育・研究活動に参加することである」と指摘されている⁷⁾。ここで松澤らのいう「学校の文化」は「受動的な勉強」として定義されており、一方で「大学の文化」は「能動的な学び」とされている⁸⁾。そして、「この違いに気づき、入学してくる高校生に大学生であるという意識を持たせることが今日の大学における重要課題である」と結論づけられている⁹⁾。

そもそも高大連携が必要とされたことの構造的な背景として、初等中等教育と高等教育とのあいだには構造的な切断があり、それらを適切に接続することは長年の懸案であったということは、すでに川嶋太津夫によって指摘されている。すなわち、「小学校から高等学校までの初等中等教育制度が主に国家統合の機構の 1 つとして国民国家の成立と歩みを共にしてきた」のに対して、大学は「それらに先立つはるか以前の中世に、医師、法曹家、神職といった専門職養成のために自治的な組織（ギルド）として出現した」とされ、それぞれの制度的な成立の事情が根本的に異なるのである¹⁰⁾。こうしたことから、別個の教育課程をつなぐという目的意識を十分に認識しないままに高大連携事業を実践してしまえば、高大連携は大学からの出前授業のような表層的な取り組みにとどまり、高校と大学双方の人的リソースを投下するに見合った成果を生まないという懸念も指摘することができる。また、そのような場合、高校三年生と大学一年生でおなじカリキュ

ラムを重複して学ぶことにもなってしまうなどの弊害についてもすでに指摘されており¹¹⁾、生徒／学生の学習体験がかなわずしも深まらない、といった場合は現場レベルではすでにみられるようである。

本研究の場合、こうした初等中等教育と高等教育の断絶している状況は、ほかならぬ高大連携型の授業に参加した高校生たちの声からも明らかにすることができたところである。すでに、当事者からは高大連携型の授業に対するポジティブな反応を受け取っているが、そのような方向性の教育改革がなぜ必要とされているのか、という点については、さらに別の論点を盛り込みながら詳述していくことにしたい。

VI. 公教育における多様性の承認

高大連携事業に代表される異なる教育区分をつなぐ取り組みの必要性を、多様性の承認というキーワードで明らかにしたい。また、公教育における多様性の承認のひとつの実例として、ここではすこし視点を変えて、近代日本において男女間の教育の機会均等が実質化されていった過程について触れておくことにしたい。今日ではごく当たり前のことのように思われる事柄に他ならないが、これを実質化するまでの過程においてはさまざまな制約があったわけであり、関係者の不断の努力によってようやく獲得されていった事例であるといえる。そもそも明治期には、多少の例外はあるものの、教育を受ける権利は基本的に男子に限られていた。女子教育については、高等教育に直接的につながるものというより、どちらかといえば、生活にかかわる家事能力などの開発に特化していたようである。一例として、明治時代の思想家であり、学校経営などのかたちで教育事業にもかかわった経験を持つ内村鑑三は、一時期、女子独立学園の校長に就任したことがあるが、その教育内容は当時の男子に許されていたような高等教育とは根本的に異なる内容であった。1913（大正2）年に東北帝国大学が4人の女子学生の入学を許可したことは注目されたが、それも当時の文部省の方針からは異例のことであった。

以上の男女間の教育上の機会均等へと至る流れを踏まえた上で、多様性の承認という理念が現代の教育に対して持っている意義を抽出しておきたい。現在、縮小・廃止の議論が交わされている人文系学部は女子学生を多く受け入れる傾向があり、男女間の教育の機会均等に寄与し、男女の協働による学びの機会をつくってきた側面があるともいえる。さらに2010年代に入ってから「リケジョ」と呼ばれる言葉によって理系学部への女子学生の進学が奨励されているが、こうした流れは、先に述べたような近代日本の教育改革の過程において見られたものと同様の流れのうちに位置付けることができる。以上のように、近代日本における教育は、基本的に男子にのみ教育機会が与えられていた時代から、男女のあいだに平等に教育機会が与えられることが原則とされる時代へと移り変わっていったことを確認することができる。いうまでもなく、個別の家庭の事情、方針によって、かならずしもこうした社会の理念通りに女子の進学が許されているわけでは

ない点には留意しておかなくてはならないが、文部科学省を中心に提示されてきた理念としては、上記のように、時代の変化とともに男女の隔てなく門戸を開放する流れになっていったのである。その根幹にあるのは、苦野の提示していた「自由の相互承認」¹²⁾、あるいは、多様性の承認という市民社会の統制原理である。さらに価値観の多様化しつつある21世紀現在、今後の大学改革や教育改革を検討するにあたっては、このような多様性の承認という近代社会の統制的原理を踏まえた上で、その具体的な方策が検討されなくてはならないといえるだろう。

VII. 異世代間教育の理念について

つづいて、高大連携に代表される協働の意義について見ていくことにしたい。結論を先取りしていえば、その根幹をなしているのは、前章において導き出した多様性の承認という統制的原理を実質化する取り組みとしての意義である。以下、その概念規定について吟味しながら、今日の社会における異世代間教育の意義を明らかにしたい。そのために、まずは子どもと高齢者の交流までを含めた、広義の異世代交流について見ていくことにしたい。

高大連携の取り組みは、教育課程において実施される事業である以前に、人と人との相互交流であり、また、高校生と大学生という若者同士とはいえ、そこに介在する教員も含めて、異なる世代の当事者をキーパーソンとする能動的な働きかけである。それゆえに、これまでの初等中等教育と高等教育という狭義の枠組みにとらわれることなく、人と人をつなぐゆるやかな交流の場としての広い視野に立った再検討を試みることによって、従前の議論にあるような多様性の承認につながる新しい視点が開かれるのではないかと考えられる。前述の渡邊慶一によれば、異世代交流の多くは、「他者からの「待つ」という能動的な働きかけによって、その存在の仕方そのものが変わっていく子どもと高齢者が出会い、つながりを創っていく場である」と定義されている¹³⁾。渡邊の「待つ」というキーワードを含む論述は、驚田清一らの思索をふまえたケアの視点であり、それは、能動性／受動性といった契機を相対化しながら、一人ひとりの市民をアクターとしながら互いに協働していくための契機として意味づけることができる。また、「待つ」というキーワードを用いることによって、生徒／学生同士の積極的なかかわりを前提としている高大連携事業のなかに、互いの成長を一步退いて見守るという受動性の契機を含ませることもできる。この能動性／受動性という相補的な概念は、成長過程にある生徒たちを見守り、その成長を促す上でのひとつの鍵となるのではないかと考えられる。協働的な学習の場においては、たとえば近年のアクティブ・ラーニングといった用語のうちに明確に現れているように、積極性や能動性といった生徒の資質が暗黙の前提として盛り込まれている。それは、これまでの一斉型授業にはなかった個性の伸長という目的のために講ぜられたものであるが、一方で、異なる者同士のかかわりあいには、能動的な個性の伸長だけでなく、協働性という理念のもとで互いの存在を相対化しながら学び合うという受動的な関わり合いが求められることもある。これを従来の（消極性というニュア

ンスの伴う) 受動性と差別化するために受動的主体性として定義するとすれば、今日の学び合いや協働的学習において求められる生徒/学生像とは、そのように互いの存在を承認しあいながら自己の信念を柔軟に変化させ、状況に応じた行動が可能な人材であるといえるのではないだろうか。

これまでの高大連携事業は、もっぱら教育制度上のひとつの取り組みとして、また、もっぱらその教育的効果の促進というレベルで論じられ、実施されてきた側面がある。しかし、その実際の効果は制度的な改善にとどまらず、大学生と高校生、さらには教員もふくめた、市民社会のなかでの多様な人間の交流の場の形成という広範性を伴っている。元来、教育はカリキュラムに基づいて指導するだけでは十全な役割を果たし得ず、感化、薫陶といった人格的なレベルでの影響関係をも含みうるものであった。それは、前近代における徒弟制などのレベルから、近代以降の学校教育における師弟関係に至るまで、当たり前のこととして受け止められてきた側面がある。戦後、ある面においては安定期ともいえる高度成長期において、社会人育成のための視点がしだいに固定化され、センター試験などの受験システム、新卒一括採用を通じて、個性を評価するという側面が抜け落ちていたことはすでに認識されていると考えられる。センター試験の廃止、一般入試と並行して実施されるさまざまな入試選抜システムといった取り組みと並ぶかたちで、本稿においては、高大連携事業の異世代交流としての意義をあらためて強調することにしたい。そのような初歩的な前提を明示化することによって、協働としての意義のみならず、異世代交流、さらには兄弟姉妹のいない生徒のよき相談役の提供、あるいは大学進学への導き、といった積極的な相互交流が可能となると考えられる。

VIII. まとめ

本稿では、高大連携事業に代表される試みについて、その特色を異世代交流という側面によって把握し、これまでの教育制度が抱えていた初等中等教育と高等教育の断絶を解消する取り組みとしての意義を導き出した。また、こうした視点は、苦野一徳が言及しているように、近代社会の歴史的過程において獲得されてきた「自由の相互承認」¹⁴⁾という理念とも合致するものである。この理念に基づく教育改革を推し進めていくことには、市民社会における教育機能を担っている学校という場所の意義を引き出す上で、十分な妥当性があると結論づけることができる。

21世紀、交通手段と情報通信技術の進歩も相俟って、国際情勢においても、日常生活においても、異なる価値観をもった他者とかかわる局面はますます多くなっているといえる。このような状況を前提とした場合、これまでのように同世代によるクラス編成を基調とする集団に基づく学校運営は、かならずしも多様性の承認という理念に即しているとはいえないのではないだろうか。以上の論点から、異世代教育の可能性を担保するためのひとつの方法論として、高大連携事業に代表される教育課程を接続する取り組みには、受験制度改革という側面のみならず、市民社会の

機能の一端を担うものとしての教育機関の再定義という側面においてもまた、大きな意義があると結論づけることができる。

引用文献、注

- 1) 苫野一徳『どのような教育が「よい」教育か』（講談社、2011年8月）27頁
- 2) 苫野一徳「異文化異世代教育環境」創造の可能性－教育における「異文化異世代」間「相互作用」の観点から－、『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』14号-1（早稲田大学大学院教育学研究科、2006年9月）131-141頁
- 3) 渡邊慶一「「待つ」ことを必要とする人々－異世代交流による出会い－」、『京都聖母女学院短期大学研究紀要』第43集（2014年3月、京都聖母女学院短期大学）59頁
- 4) 前掲書、3)の61頁
- 5) 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（中央教育審議会、1999年12月）
- 6) 柳孝郎・福島愛子・松澤哲郎「2002年度高等学校－大阪教育大学（高大）連携夏期集中講座 [生命科学：ES細胞からクローン人間へ、そのクローン無性生殖の結果は?]の授業内容分析と今後の高大連携のあり方について」、『大阪教育大学紀要 第V部門』第53巻第1号、大阪教育大学、2004年9月、57頁
- 7) 前掲書、6)の57頁
- 8) 前掲書、6)の57頁
- 9) 前掲書、6)の57頁
- 10) 初年次教育学会（編）『初年次教育の現状と未来』（世界思想社、2013年1月）の第三章。43頁。
- 11) 前掲書、10)の第二章には、初年次教育のさまざまな困難についての言及がみられる。
- 12) 前掲書、1)の27頁
- 13) 前掲書、3)の59頁
- 14) 前掲書、1)の27頁

付記：本稿は、2016年度流通科学大学教育実践推進費（研究課題名：「新しい高大接続プログラム開発に向けた研究」）の助成を受けた研究成果の一部である。